



## 秋の匂いにおもうこと

日中は過ごしやすくなってきた。先日、車の窓を開け、田舎道を走っていると懐かしい匂いがする気がした。車を端に寄せて降りると、黄金色の田んぼで青色のコンバインが忙しそうに動いている。稲刈りだ。子どもの頃、祖父の手伝いで何度も嗅

いだことのある懐かしい匂い。脱穀の時にもみ殻が服の下に入っただけのこと、収穫した米を神社に届けた思い出がよみがえる。

田んぼ脇にスーツ姿でたたずむ僕の姿が奇妙に映ったのか、作業中の農家さんが話し掛けてくれた。「今年の出来はいかがですか」と尋ねると、「今年も天気に悩まされたよ、少し小粒で。ここ最近はいつもそうだ」。長年の経験を生かし、いくら丹精込めて育てても気候にはかなわならしい。

そんな話を聞きながら、ふと思った。米の出来の良しあしは

農家さんの努力のみでは語れなくなっている。人々の生活の在り方が気候や環境に大きな影響を与えているという話を聞くとなおさら、人ごとには思えない。

これは祖母から教わったことだが、米は作る時に神様が宿る。だからよくかんでいただくと甘い味がするのだと。もしかしたら神様というのは私たちの生活を映し出している鏡のようなものかもしれない。便利さのみを追求した生活様式だけでなく、もう少し地球規模で自分の生活を考えなくてはいけない。

そんなことを思いながら家路

に着くと、実家から電話がかかってきた。「新米ができたから送ったぞ」。祖父から受け継いだ田んぼを守る父の声だ。うれしく思うのと同時に、何だか今年のわが家の暮らしぶりが評価されるようで少し緊張する。最初はおむすびにしていたころと思う。この米を未来の子どもたちもおいしく食べている姿を想像しながら。

---

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。41歳。